

百人一首カルタ「セレクト 20」を用いた実践的国語授業研究

2020. 1

和歌山大学 菊川恵三

【ねらいと背景】

この事業は、和歌山大学国語教室で開発した百人一首カルタ「セレクト 20」を、実際の学校現場で学部学生と現職教員が協力して進めることを考えた。現場教員にとっては、カルタを使った新しい国語科授業の経験、学部学生にとっては教育実習のような指導を受ける立場ではなく、教員と協働作業をすることで、教育実践力の向上に役立てることにある。

【実施状況】

本年度の参加校と実施状況は以下に一覧表にして示した。

平成 30 年度百人一首カルタ実践校一覧（\*は実践的地域連携研究）

	学校	担当教諭 学年・クラス	担当学生	実施日時と内容	特徴・反省
2	藤戸台小	3年生5クラス 出合拓美先生	贅川、木村	① 11/12 カルタ制作 ② 11/21 色紙作り ③ 11/27 カルタ大会	①は大学の小学校教科「国語」の学生が参観。 5クラス同時なので学生の数と用意が大変。
3	伏虎義務	4年3クラス	光永、神谷、木村	① 1/30 カルタ制作 ② 2/7 色紙作り ③ 2/21 カルタ大会	今年初めて
4	浜の宮小	4年3クラス	光永、神谷、木村	2月後半を予定 ① カルタ制作 ② 色紙作り ③ カルタ大会	
5	吉備中学	三木由起子先生 1年5クラス	金谷、贅川、山口、光永 ②は大橋ゼミ	①10/1 ②12/16	②は大橋先生の「くずし字」活動とコラボ

○参加校

小学校4校、中学校1校

○クラス数と児童・生徒数

小学校12クラス 約400人 中学5クラス 150人、高校7人

○学生参加者

菊川ゼミ 4回生4名、3回生2名

**【カルタの実践授業から】**

小学校では「①カルタ+カルタ制作 ②色紙作り ③クラス対抗カルタ大会」の三点セットのプログラム（3日合計6時間）が定着し、安定的に進めることができた。

次に、各学校の取組みの特徴を報告する。

○藤戸台小学校

3年生の11月に「百人一首カルタ」が定着している。最後のクラス対抗カルタ大会は、学校開放月間に実施しており、30人ほどの保護者が参加して体育館で実施した。藤戸台小学校の特徴は、大学の小学校教科「国語」と連動させて、大学生が①の授業参観することである。百人一首カルタについての講義に続き、それを実際におこなう場合、どのような問題が起こるのか、実際に参観できるのはまさに実践的授業研究に相応しい。

菊川ゼミの卒業生が、藤戸台に赴任しこの授業を一緒に実施でき良い循環ができています。

○伏虎義務教育学校・浜の宮小学校

浜の宮小学校（教頭）から伏虎義務（教頭）に転任された小杉先生から、要請があり共同研究をすることになった。ただ、1月末から2月にかけてなので、原稿を書いている間には未実施の状態である。伏虎義務は初めてなので、どのような反応がかえってくるか楽しみにしている。

○有田川町立吉備中学

今年の吉備中学は、三木先生が1年生の担当ということで、小学校との連続を意識して、百人一首カルタの実習とカルタ作りをおこなった。今年の新機軸は、2回目の大橋ゼミの学生たちによる「くずし字」を用いた古典入門授業である。中1には難しい「くずし字解説」だが、浦島太郎を教材にするなど、親しみやすい工夫をすることで、生徒たちは思った以上の興味を持って学習できた。

### 【学生の成長の観点から】

現場教員と協力するだけでなく、学生を積極的に授業に出すことで、自分の授業としてしっかり準備するとともに、現職教員との打ち合わせなどを通して教員としてコミュニケーション力を磨く。

上記のねらいを持って、学生昨年同様、「3回生が中心、4回生はバックアップ」の体制でのぞんだ。一人5～6回、小・中学校で多数の経験をつむことで、自信を付けて行くのが感じられる。教育実習と違い、自分たちが熟知した百人一首教材で授業をすることで、確かな手ごたえを感じているようだ。

今年は、同じ古典の大橋ゼミの学生とコラボできたのが大きな収穫である。日ごろ、仲のいい学生同士だが、それぞれの得意分野を生かしつつ中学1年生に向き合った経験は、教員となった時に生かせるだろう。今年もゼミの4回生たち4名は、高校・中学・小学校の教員として巣立っていく。

以上